

## 初級学習者向け授業における 日本語訳の有用性とその限界

**KIMOTO Yutaka**

Université Doshisha

**KISHI Ayako**

Université des Etudes étrangères de Kyoto

quimotoy?ybb.ne.jp

### 1. はじめに

初級学習者向けの授業は、ある程度のコミュニケーション能力を身に付ける、基本文型等基本的な文法事項を学ぶ、ということを目指す授業である。大学における初級学習では、さらに中級でのより複雑な文章の理解・作成などにスムーズに進めるだけのフランス語能力を習得することが望まれる。初級の授業では学習者の中にフランス語システムの最初の段階が作られなければならないわけである。

この目的をクリアするためにどのように授業をしていけばよいのか。ここでは大学の初級クラスでのフランス語習得と、教師が日本語母語話者である場合にはクラス全体の共通語である日本語との関係に絞って考察してみようと思う。

具体的には、二人の筆者の授業の経験をもとに、二つのタイプの初學者向け授業の場合を考える。一つは既得言語である日本語で書かれた教科書を使用してフランス語を理解させようとする授業の場合である。もう一つはできる限り学習言語であるフランス語を用いてフランス語を教える授業である。前者のタイプの授業で日本語訳が用いられることは多いが、これはどこまで有効であるのか。また後者のタイプの授業に日本語訳をあえて使うことの意味はどこにあるのか。これらについての考察を通じて、初級学習におけるより効果的な日本語訳の利用方法を模索していきたい。

### 2. 日本語を用いてのフランス語理解を機軸とする授業での日本語訳(岸)

日本語で書かれた教科書を使う、教える側が日本人であるなどの場合には、日本語を用いてフランス語を教えることになる。このような場合、授業ではしばしば日本語訳が使われる。日本製の教科書には随所に日本語による訳があり、説明も日本語でなされていることが多い。教える側が日本人であれば補足説明も日本語で行われることが多いし、簡単な仏文を訳させる練習問題を出すこともあるだろう。このような日本語を用いた授業では、日本語訳は、内容を理解させるために、また理解を確認するために必要なツールとして設定されていると言える。

説明として日本語訳を与える、フランス語の文を訳させるということの大きな利点には次の二点が挙げられるだろう。まず一つ目は説明のスムーズな理解である。初級学習者のフランス語理解力は非常に限られたものであり、フランス語のみで理解させるにはかなりの時間と工夫がいる。だが、学習者と教える側との共通の言語である日本語を用いればよりスムーズな理解が望める。

また、学習者が既に高度な理解力を持っているこの共通言語を利用することで、込み入った事柄も詳しく説明でき、その理解が望める。フランス語では一から説明しなければならない事項でも、既得言語の日本語に対応する語彙などがあれば、それを示せば良い。二つ目の利点はこの効率の良さである。大学での授業時間は限られており、この利点は大きい。

日本語訳を授業で用いることにはこのような利点があるのだが、注意しなければならない点もある。それは、学習者に「フランス語理解は単にフランス語の文から日本語の文への置き換えである」と誤解させないことである。この誤解を避けるためには、フランス語という言語システムでは、日本語とは異なる見方でものごとが表されるということを折に触れて強調する必要があると思われる。

では、学習者のどのような間違いから、「フランス語理解＝訳＝置き換え」という誤解があることが分かるのか。具体的な例として、複合過去、受動態の文法説明を既に受けている学習者に「*Il a été arrêté.*」という文を訳させたとしてみよう。学習者は既に知っている *arrêter* の意味から「彼は止めた」としたり(あるいは「彼は止める」のこともある)、「逮捕する」という訳が見つけれられても「彼は逮捕した」としてしまうことがある。この訳からこの学生が受動態ができていないことが分かり、その点では日本語訳させることは有益であると言える。だがそれだけでなく、ここで、なぜ、単語の置き換えから即日本語文を作るといことが起こってしまうのかということを考えたい。

上記の例を少し変えて「*Il a été arrêté par la police.*」として出してみると、*police*「警察」という言葉と「逮捕する」という言葉の組み合わせから、同じ学習者でも「彼は警察に逮捕された」ができたり、または「警察につかまった」という練れた訳ができることがある。しかしこの時学習者は中心となる言葉、よりはっきり言えば長くて目立つ言葉の語彙的意味にしか注意を向けていないのであり、二つの単語の「訳」から一足飛びに日本語の文に行き着こうとしているのである。一見練れた訳は文の全ての要素を考慮に入れた結果ではなく、文の一部と推測でできたものなのである。

このようなことが起きるのは日本語訳させること自体に問題があるのではなく、むしろ、内容を理解した証明として訳を引きだそうとする教員側にも、学習者側にも、日本語訳に過度な期待があることによると考えられる。過度な期待とは、日本語訳を得ることがフランス語の文を理解したことでありと考えることである。訳＝理解と考えていけば訳が最重要なものとなり、訳さえ聞き取っておけば文法説明を多少聞きのがしたところで安心できるということになる。

上の例のように学生の訳から漏れやすいのは文法要素である。名詞の性・数、定/不定など日本語システムには無く、したがって訳には表面上現れないものがフランス語の文中にはある。これらは「なぜあるか分からないもの」、「煩雑で憶えなければいけない規則」と捉えられ、学習者は意味の伝達の上では二次的なものだと考える。過去の「～た」を現在形「～る」と間違えても重大な間違いをしたという意識は学習者にはない。そして複雑で規則ばかりに見える *grammatical* な要素を考慮に入れることなく、*lexical* な単語だけで日

本語の文に到達できるとなれば、少々推測を働かせなければならないとしても、最短距離で理解できる道だと考えてしまうことになる。

文法は仏単語の単なる日本語単語への置き換えと文の理解の間に位置する。文法的要素が文理解に不可欠なものであることを納得させるには、文の仕組みを繰り返し説明することは勿論だが、文法がフランス語での考え方を表すものであり、意味のある規則として説明することが必要だろう。日本語の文法事項を考え方の反映として捉える経験の少ない学習者には、文法は意味理解に直結するものとしては理解されにくい。

だが、当該の文法事項が、自分のどういう考えを表したい時に使える規則か、どのような見方を表現できるツールであるかということに、事項説明の際に言及することで文法を意味の構築・理解に必要なものとして認識させることができる。そして適当な文脈・シチュエーションを作ってその文法事項を用いて学生自身のことを語らせることで、モチベーションを高めつつ、フランス語のシステム内で考えることを徐々に身に付けさせて行くことが可能になる。

自分が小さい時にしてもらったことや叱られた思い出を話そうとする時、Jeで始めれば *suis grondé...*と続くこと、この形を使えば誰に叱られたかは言わずにおけることをのみこむことで、フランス語の受動態は学習者の考えを表すツールとなる。これはまたこの形から他者の考えを理解できるようになったということである。日本語で「...と言われた」は可能だがフランス語では\**Je suis dit...*とは言えないことについて、さらには日本語の「贈られた花」と「(花を)贈られたマリ」の違いについても考えられるようになれば、学習者の中では既に二つ目の言語システムであるフランス語システムが作られつつあると考えてよいだろう。

### 3. フランス語によるフランス語理解を機軸とする授業での日本語訳(木元)

ディアログなどを初學者用の教材として用いる場合、聴覚による理解を優先するか、文字を通しての理解を優先するかは、授業形態を左右するひとつの大きな選択である。というのも、聴覚による理解を優先させたい場合には、あらかじめディアログをテキストとして読ませるなどの予習は避けることが望ましいからである。さもなければ、学生はディアログを聴いた時にすでに記憶している内容を追認するにとどまり、結局文字による理解を優先させることになってしまう。そして、上記の選択は日本語訳の有用性の問題に大きく関わってくる。なぜなら、日本語訳はフランス語を文字情報として処理する場合に特に有用な手段であって、耳からの情報の処理には適さないからである。このことは、同時通訳というものが特殊技能に属することを考えてみれば、すぐに分かることである。

筆者の使用したことのあるフランス製の教科書はすべて、聴覚による理解を文字による理解に優先させ、フランス語をフランス語で理解させることを機軸に考案されている。教科書付属の指導要領には、まずはテキストを見せずにディアログを聴かせ、内容を把握させることが説かれている。ある程度の内容把握ができて初めて、学生にテキストを与えるのである。しかも、内容把握の確認はフランス語による質議応答で行うことが前提となっている。したがって、教科書の方針を遵守する限り、日本語訳の介入の余地はないことになる。ところが、実際に授業してみた(筆者はネイティブと共同でこのような教科書を使用していたのであるが)、日本語訳も適切に用いれば、聴覚理解優先の授業方針を大きく損なわず、かえって様々な利点があることに気付いたのである。それはどのような場合か、以下具体的に述べてみたい。

最初に述べたように、聴覚による理解を優先するには、テキストを読ませる前にディアローグを聴かせなければ意味がない。ところが、自然な速度のディアローグの場合、内容が複雑になってくると学生が理解できない箇所がかなり多くなっていく。こういう場合、反復的にディアローグを聴かせても、3回目ぐらいから学生が聞き取ろうという気力を失ってしまふ。これでは元も子もない。試行錯誤の結果、新出語彙と新出の重要表現をリストアップして、ディアローグを聴かせる前にそれらの発音を教え、日本語で意味を確認することにした。すると、聞き取れる単語量が増えることと、単語の意味は分かっているという安心感から学生の積極性が増すことが分かった。この場合、単語の意味を与えてしまっても、ディアローグの内容まで教えることにはならないから、聴覚による理解を優先させるという方針にそれほど抵触しない。さらに、単語の意味に関しては日本語訳を用いることで、授業の能率が上がるし、学生の注意をディアローグの聞き取りに集中させることができる。最終的に学生の学習意欲を高めることにつながるのであるから、この日本語訳の使用は有効であると言えないだろうか。ちなみに上記のようなディアローグ導入方法を取るに至ったのは筆者だけではなかったということを断っておく。

しかし、日本語訳の有用性は上記のような、どちらかといえば消極的な用例に限られるわけではない。ディアローグの内容に関する学生の理解を確認する際にも、日本語訳が有用になることがある。むしろ我々の前提はできるだけフランス語によるフランス語の理解を促進するということであるから、フランス語を用いた質疑応答などを通して学生の理解を確認していくのが望ましいことはいまでもない。そのような作業は学生にフランス語を使わせるために是非とも必要である。しかし、ディアローグを聴かせ、テキストを読ませ、更に上記のようにフランス語を用いての理解確認をした後であっても、なおテキスト中の文を日本語に訳させるなどの確認作業をした方がよい場合がある。というのも、フランス語による質疑応答による理解確認にはどうしても限界があるからだ。まず第一に学生に理解できるフランス語のレベルの問題があって、まだ教えていない表現や文法事項を用いた質問は避けねばならないため、学生の理解が十分に確かめられないような箇所が出てくる。また、質問中の語彙だけに反応して、分かっているのに答は出せるというような場合もある。フランス語で説明するのが困難な表現も多々存在する。例えば、「Ah bon ?」といった間投詞的な表現や「Justement」といった連結語などのニュアンスをフランス語を用いて理解させようとするれば、ひとつの用例を他の用例で置き換えていくような説明方法にならざるを得ないだろう。更に、テキストの全ての文に関して、一文一文フランス語で意味を確認していくことなど不可能に近い。ところが、そうすると、ニュアンスが微妙な箇所ほど、学生にとって曖昧なままに留まることになりかねない。こういう場合に文を日本語に訳させてみると、学生がちゃんと理解できていない箇所が明らかになることが結構ある。例えば、「L'après-midi, je fais deux à trois heures de tennis」という文があったとすると、学生はしばしば「私は午後2時から3時までテニスをする」と訳したりするのだ。

最後に、文を日本語に訳させる作業は、学生が習ったことを記憶に留めるのにも役立つらしいということも指摘しておきたい。文を訳そうとするれば、文の構成要素ひとつひとつに注意深くなる必要があるからだろう。

このように、フランス語によるフランス語理解を機軸とする授業においても、日本語訳の利用価値は結構高いのである。しかし、これはフランス語を日本語に訳すことが第一義的なものではなく、あくまで補助的なものであることを学生がしっかり認識しているせいかもしれない。こういう授業では訳を丸暗記することなどまったく役に立たないのだから。そういう

意味では、逆説的ではあるが、フランス語によるフランス語理解を求める授業における方が、日本語訳は有用なのかもしれない。

#### 4. まとめ

日本でフランス語を教える場合、学習者の共通語は日本語であることが一般的であり、しかも学習者は自分の所有している言語システムを客観化するだけの能力を備えた大人であることが普通である。ならば、この共有する言語をうまく利用して外国語であるフランス語を教える方が能率的ではなかろうか。新たな言語システムの習得に必要なのは、既得の言語システムを排除することではなくて、既得の言語システムに対して新たな言語システムを並立、共存させることである。とすれば、日本におけるフランス語の授業において、日本語訳は十分有効に利用できる手段であると言えることができるだろう。とはいえ、日本語訳がフランス語理解に直結するというような短絡的な思考に学習者が陥ってしまわないよう十分に注意しなくてはならない。結局、日本語訳は、他の教育手段と同様に、有効に利用することもできれば、弊害にもなり得るものである。教える側は、日本語訳を通して何を教えることが可能かということ、場合に応じて慎重に検討していく必要があるだろう。